

## タマサngo（玉珊瑚）ナス科ナス属 \*花期=5~11月

瀬田川の河川敷の端に直径15mmほどの黄色の丸い実をつけた、今まで見たことも無い実でしたので、帰宅後調べたのですが、絶対これだったと言う自信はありませんが、タマサngoの紹介文は間違いありません。原産地、ペルー、ブラジル、エクアドル、明治中期に観賞用と渡来、暖地で野生化した、枝は緑色トゲ無い、葉は互生、卵形、全縁で波打つ、葉柄短い、花は、白色、五裂、径1.2~1.5mm、葉の反対側の枝に1~4個、常緑性低木ですが耐寒性に弱いので園芸的には1年草として扱われる。



## コムラサキ（小紫）クマツヅラ科ムラサキシキブ属、

別名、コシキブ・コムラサキシキブ、**名前の由来**=実が美しい紫色であるので源氏物語の紫式部になぞらえた、ムラサキシキブがあるので、やや実が小さいのでコムラサキとした。原産地、日本、中国、韓国、コムラサキは実が多くつき枝垂れるので庭木として植えられている、ムラサキシキブは山野に自生している、その見分け方は。ムラサキシキブは葉の全体に鋸歯がある、枝が真っ直ぐに伸び枝垂れない。コムラサキの葉の先端部分にのみ鋸歯がある、枝が枝垂れている、実が多くつく、**\*花言葉**=気品、知性、聡明、**\*花期**=7~8月・瀬田川河畔に多く見られた



## ハゼノキ（櫨の木）ウルシ科ウルシ属・別名リュウキュウハゼ

東南アジア~東アジアの暖帯域、日本では関東以西~沖縄に分布、明るい場所を好み、林縁や道路脇に生えている、江戸時代に琉球王国から持ち込まれ、それ迄木蠟の主原料のウルシの実を駆逐した。西日本各地で栽培されていたのが野生化した、幹は赤褐色で老木になると縦に剥げ落ちる、葉は互生、小葉は5~7の奇数羽状複葉、実を蒸して、压榨して採取される高融点の脂肪を木蠟、和蠟燭の原料とした、その他、座薬の軟膏、ポマード、石鹸、クレヨン、化粧品の原料として利用された、又、救荒食物として、アク抜きをして潰し、ハゼ餅としても食べられた、20世紀に入り安価なワックスに取って代られたが、近年ワックスに無い粘りや、自然品に対する見直しから需要が増えてきている。紅葉が美しいことから俳句の秋の季語で「ハゼモミジ」と称して使われている。今回瀬田川の左岸堤防沿いに多く見られた。



**名前の由来**=ハゼノキは古名を「はにし」と言った「はにし」とは埴輪（はにわ）を作る職人のこと、一般的には土師（はにし、はし、はじ）と書きます、ハゼノキの紅葉した色が埴輪の粘土の色に似ていることから「はにし」が「はじ」になりさらに「はぜ」に変わった。

## ナンキンハゼ（南京櫨）トウダイグサ科ナンキンハゼ属

**名前の由来**=櫨の木と同様に実から蠟燭の原料ができるから、南京は中国の意。中国原産の落葉性高木、紅葉が美しく、乾燥にも強いことから、街路樹、公園、学校などに植栽されている、日本でも化石で発見されているので古代には自生していたが絶滅、江戸時代に中国から渡来、種子から採取される烏臼油（うきゅうゆ）は和蠟燭の原料や薬用（腫物、皮膚病）とされた、根皮、果実は乾燥して利尿剤、車下剤、瀉下剤とした、此れを烏臼（うきゅう）という。

+**花言葉**=心が通じる、真心、**\*花期**=6~7月



過去に紹介、多く有った植物（名前が判れば図鑑で調べ易いのでどんな植物かな？と調べて下さい）

- ・メリケンカルガヤ・コセンダングサ・シロバナセンダングサ・チカラシバ・アキノメヒシバ・コメヒシバ・アキノエノコログサ・エノコログサ・オオエノコログサ・キンエノコログサ・ムラサキエノコログサ・チガヤ・オニタビラコ・カニグサ・ノキシノブ・オツタチカタバミ・ヘラオオバコ・カラムシ・オシロイバナ・アレチヌスビトハギ・アメリカイヌホオズキ・リュウゼツサイ・イタドリ・ツルヒメソバ・メドハギ・オオニシキソウ・ホソバギシギシ・セイヨウタンポポ・ホトケノザ・イノコズチ・アベリヤ・メキシコマンネングサ・スズメノヒエ・ノジスミレ・アキノノゲシ・セイタカアワダチソウ・オニタビラコ・イヌコウジュ・ヘクソカズラ・オシロイバナ・ヤブソテツ・シロツメグサ